

基本に忠実な土づくり・草づくり・牛づくりの実践

北海道江別市 河野 愛さん、崇治さん

今回は、長年当社とお付き合いがあり全国草地畜産コンクールで農林水産省局長より賞されたこともある河野 愛さんと父親の崇治さんのご紹介をさせていただきます。



1. 地域の概要

ストークランドファーム河野牧場がある江別市は石狩平野のほぼ中央に位置し、札幌市に隣接する地域でありながら畑作、稲作、酪畜産業が盛んな農業地帯である。北海道内では比較的温暖な地域だが冬には積雪が2m近くにもなり氷点下20度を下回ることもある地域である。

2. 経営の概要

河野牧場は現経営者の河野 愛さんと父の崇治さんとの家族経営をおこなっている。ストークランドという冠名は「河野」と幸せを運ぶ「コウノトリ (Stork)」をかけて、崇治さんがコウノトリが運ぶ幸せにあやかりたいという思いで、崇治さんの結婚後まもなく名付けられた。1938年に愛さんの祖父 故・鉄雄氏が水田酪農を開始、父の崇治さんは1966年に酪農学園大学を卒業後就農、26歳で経営移譲を受ける。1974年にはそれまで水田酪農であった経営を酪農専業とした。その後規模を拡大し1993年には100頭入りのフリーストール牛舎、ミルクングパーラーを導入してきた。2018年には2台のロボットを導入している。圃場は80町、搾乳牛は約120頭、未經産牛は約150頭の規模である。

1頭当たりの平均乳量は1万2千kg以上を維持し、1万3千kg以上の年も多く、分娩間隔は400日以下を維持している。体細胞数は10万以下を維持し、乳量だけでなく繁殖成績、乳質が高いことも特徴の一つだ。

河野牧場では〈基本に忠実な「土づくり・草づくり・牛づくり」の実践〉を経営方針に掲げ、家族、地域、仲間と共に歩む酪農経営を展開している。

3. こだわりの「土づくり」

「土づくり」では、手間を惜しまず完熟堆肥をつくることにこだわり、草地への還元をすることで循環型酪農を実践している。土づくりにこだわるのは、大学時代の先生(酪農学園大学 故・原田勇博士)が土の先生だったからだと言及し崇治さんは話す。「基本に忠実」を実践しながら管理している河野さんの圃場は毎年土壌分析を実施、結果を確認し必要な成分を補い、定期的な草地更新により高収量を維持している。バイオガスの活用注目することは重要だが消化液をそのまま撒くことは、土

壤の物理性を悪くし微生物の活動を抑制させてしまい、本当の循環型酪農ではないと考え完熟させた堆肥を還元するようにしている。このこだわりの土づくりが、いい草、いい牛づくりを根本から支えている。



堆肥舎の様子

4. 命をつなぐ良質な「草づくり」

「草づくり」では、良質な粗飼料の生産を目指し、チモシー、アルファルファ、デントコーンを生産している。道央圏ではまだあまり多くないアルファルファ生産に成功しており、良質な土で育った草は糖分が高く牛が良く食べ、乾物摂取量は25kg/頭日ほどにもなる。2002年には全国草地畜産コンクールで農林水産省局長賞を受賞するほど。こだわりの草は、種雄牛が食欲不振な時に獣医の勧めで河野牧場の草を食べさせたところ元気になったことがあるほどだ。



アルファルファの圃場

5. ゲノム検査から見えてきた「牛づくり」の結果

「牛づくり」では積極的な遺伝的改良に取り組み、

乳牛快適性の提供による生乳生産性向上と良質乳生産を目指している。2005年には第1回全道乳質改善大賞を受賞している。種雄牛選定は崇治さんが行っており、牛群の改良に積極的に取り組んでいる。判別精液を使うことで、年間に120頭中95頭のメスが生まれている。ゲノム検査はGNTPだけでなく最近ではGTPIにも取り組み高いレベルの検査結果が続々と出てきている。なかでも「お腹にやさしい牛乳」を出すと言われるA2A2遺伝子を持つ牛は、一般的に牛群の2割程度と言われているが河野牧場には6割もいたそう。ゲノム検査が始まる前から取り組んできた改良の証と言える。

6. 好成績を維持する秘訣

崇治さんは行き過ぎた無肥料、無配合飼料のやり方では乳量1万3千kgのような成績は維持できない、適度に使っていくことで好成績になると考えている。いいと思うことには手間とお金をかける。敷料の麦稈は通路にもふんだんに敷くことで足の病気を抑え、いい堆肥づくりにもつながる。質のいい乾草は育成牛、乾乳牛にもたっぷりと与え、粗飼料は定期的に分析し、当社のトータルサポート室と連携しながら飼料設計をすることで乳量を高水準に保ちながら繁殖成績も保っている。「特別なことは何もしていない」と口で言うのは簡単だが、基本を実行することが一番難しく重要なことで、それを実行してきたことが今の結果につながったと話す。

7. 現経営者 愛さんの考える今後

現経営者の愛さんは子育てをしながら牛舎の仕事もこなす大忙しだ。それでもこだわりの堆肥をはじめ、アルファルファの利用、こまやかな牛の健康管理ができる環境づくりを継続していきたいと話す。「継続する」ことは簡単ではなく、高いレベルの技術を維持するには家族、従業員全員が妥協せずいいものを作ろうとする意識を共有する必要があると考えている。堆肥づくりとアルファルファサイレージ調整も手間と技術が必要となる分、その効果を実感しているからこそ妥協はしない。崇治さんの手間を惜しまずいいものを作るためにこだわる姿勢は愛さんにもしっかりと受け継がれているようだ。